東京都区部および周辺地域の「地域イメージ」の構造

尾 藤 章 雄*

本研究は、地域に対して人々が抱くイメージと地域固有の属性とに基づいて、人々の認知する地域のイメージの構造を、東京都区部および周辺地域を対象に明らかにした。方法は、Downs and Stea (1973) の地理的環境、行動的環境の概念および Gould and White (1974) の知覚のフィルターに関する概念に基づいた。本研究は第1段階として、地域分化の明確な居住者と、これをとりまく諸要素から地域に特徴的なものを抽出した。第2段階として、その地域のイメージとこれら要素を対照して、地域のイメージに関連したとみられるものを選出した。最後に選出された要素と、関連づけられた地域のイメージの空間的広がりに基づいて人々の認知する地域のイメージの配列形態を求め、その構造を明らかにした。この結果、人々に認知された地域のイメージは、都心を中心として不規則な境界を接して配列し、さまざまな居住者や要素との関連に基づいていくつかの方向性を示すことが明らかになった。

I 序 論

1. 本研究の課題

本研究は、地域に対して人々が抱くイメージと地域固有の属性とに基づいて、人々に捉えられた地域のイメージの構造を、東京都区部および周辺地域を対象に明らかにしようとする。

筆者はかつて東京都区部を中心とした地域について類似の研究を行ない、代表的な4つのタイプの地域性を識別し、その配列形態を明らかにした (Bito, 1991)。しかしながらこの結果によれば、城南地域がどのタイプにも包括されず、また近年発展の著しい東京湾岸地域が上野、浅草と同じタイプに包括されるなど納得しがたい点がいくつか見出された。そこで本研究では、以前の研究方法をさらに広域の地域に適用し、上述の問題点を解消しようさらに詳細な地域のイメージの広がりを明らかにしようとした。

心理学などの隣接分野から導入された「イメージ」の用語に対して¹⁾、地理学など空間を扱う分野でのその概念は一時混乱の様相を呈していたが、近年の優れた研究により一定のコンセンサスが得られ

つつある。内田 (1987) は、環境としての地理的空間一場所に対して、ある主体が思い描く心的な内容のすべてを場所イメージと定義した。本研究の対象とするイメージも、地理的空間に対して人間が抱く心的な内容を指すものとして、基本的にはこの先学の概念を踏襲する。

従来から都市内については、居住者をはじめさまざまな属性の分布に基づいた地域構造の検討がなされてきた。因子生態分析からは、住宅特性、商・工業機能などいくつかの重要な指標が抽出され、これらによる類型化から、都心部を中心とした同心円状、扇形状をはじめとしたさまざまな地域構造が提唱されてきた (服部ほか, 1960; 山田ほか, 1974; 福原, 1977; 園部, 1985)。しかし、われわれが都市内の地域に対して抱くさまざまな思いは、これら属性のみに基づいて形成されているのではない。たとえばその場所の歴史的な形成過程、過去に起こった事件や自分の居住する地域との関係、世間の評判などその場所に関するさまざまな事柄がわれわれの認知に有形無形に作用している。

このような事柄によって人々が抱く場所イメージは、広範囲の人々に知られ確認されるにつれて、個人差を越えた共通性をもつものとなるが、都市住民

*山梨大学教育学部

の大多数が共通に抱いているこの心象に Lynch (1960) はパブリック・イメージという用語を当てた。本研究は都市域にみられるこのパブリックな場所イメージ、すなわち「都市域の環境に対して大多数の人々が共通に思い描く心的な内容」を「地域イメージ」と定義し、研究を進めていくことにする²⁾。

なおここで扱う地域イメージの構造とは、イメージそれ自身の内容についてを指すのではなく、地域イメージがそれぞれの場所でどのような要因から形成され、その形成過程の地域的差異に基づいて地域がどのように区分されるのか、さらには、区分された地域の配列形態が都市空間の中でどのように体系づけられるのかを意味する。すなわち本研究では、イメージの構造を地域構造の1つとして捉えており、以下で展開される方法論は、地域構造としてのイメージの構造を明らかにしようとする過程である。

2. 従来の研究

イメージを地理学的に分析しようとする場合に問題となるのは、それが個人の特質（ボウルディング, 1979, pp. 66-67）であり、地域の具体的な属性ではないので、いかにしてこれを分析対象として捉えるかという点であろう。本研究では、地域イメージの構造を、地域イメージに基づいて区分された地域の配列形態から明らかにしようとしており、地域区分に役立つイメージの把握が必要である。本研究で扱う地域イメージとは、前述のとおり都市域の環境に対して人々が思い描くものであり、その意味から Downs and Stea (1973) の定義した環境イメージに含まれる。そこで、ここでは環境イメージを捉えようとした従来の研究例を概観する。

Downs and Stea (1973) は人間の行動形態と人間のもつ認知地図について研究し、人間の空間行動がこの地図に依存することを指摘した。人間の行動形態を規定するとされるこの地図はメンタルマップと呼ばれ、イメージの有効な表象手段であることか

ら、いくつかの先駆的研究に利用されてきた³⁾。Gould and White (1974) は、居住地選好のデータに主成分分析法を適用し、成分スコアの地図化によって選好曲面の表象を行なうという方法を用いて、各地で実証研究を行なった。また中村(1978, 1979a, 1979b) は、居住地選好に関する研究の成果をまとめる一方で、同様の方法による実証研究を行なった。これらの研究から、ある地域の人間集団には共通したメンタルマップが存在すること、それは地域の自然環境、空間的形狀、地域構造、社会構造といった客観的諸条件を反映しながらも複雑な形状を呈することが明らかになった。メンタルマップの定量的分析によってイメージを捉える方法は、イメージの様態が定量的に地図化されるという点で優れた方法である。しかし人々がそのイメージをもつようになった要因に言及できないという問題点をもっている。

人々がイメージをもつようになった要因に言及できる方法として Lynch (1960) の採用した描図法がある。わが国でも多数の研究例（岩本, 1981；寺本, 1984）があるが、Day (1976) が指摘したように、この方法は、被検者の描図能力と調査時間、調査紙の大きさなど調査方法に由来する誤差が大きく、また分析に多大な労力を必要とするという難点がある。

イメージの構造を把握する方法として、Osgood *et al.* (1957) によって提唱された意味微分法（SD法）があり、多数の研究例がある（Johnston, 1973；Cadwallader, 1979；Hourihan, 1984）。この方法は、形容詞からなる対尺度を評定させる評定尺度法と、情緒的意味の次元を抽出するための因子分析法からなる。わが国でも今栄(1969)など多数の研究例があるが、安藤(1982)が指摘したように、この方法では、人々がそのイメージをもつようになった要因に言及できないうえに、イメージの構造を地域に即して表わすことができないという問題

点がある。

なおイメージの構造を地図として表現できる方法として多次元尺度構成法(MDS法)がある(Demko, 1974; Hourihan, 1979; Preston, 1982)。この方法では、イメージ間の類似性に基づいて地域間の相対的布置を求めることができ、得られた布置から地域のグルーピングが可能である。さらに布置と関係をもつと考えられる変数と布置との間で線形重回帰分析を行なうことによって全体の布置に重要な役割を果たした地域的要因に言及することもできる(Kruskal and Wish, 1978)。しかし都市域のように、狭い地域に多様なイメージが混在する場合には、その布置から地域区分に論ずるのは困難である。

服部は、実務的な側面から都市内のイメージを捉える研究を続けてきた。彼は8つの盛り場と10の町が、東京周辺の人々にどのようなイメージをもたれているかを知る目的で、これらの町に想起されるシンボル、形容する語を調査し⁴⁾、さまざまな角度から分類・解釈を行なった(東京商工会議所, 1984, 1987)。この方法は、各町のイメージについて具体的な地域の要素との関係が明らかにされるという利点があり、また代表的なイメージを表わす語を選択させる方法によって、人々がそのイメージを共通に認知する程度を知ることにも可能となる。多くの人々に共通な有標空間——意味・記号のある空間——の性質を、30の町から想起されるシンボルと50対の形容詞によって調査した桜井(1984)も同様の例である。

以上の従来の研究を概観すると、本研究で目的とするように、都市内で人々に認知されているイメージの形成要因とイメージの形成過程に基づいて地域区分に結びつけていけるような方法は見あたらず、目的に即して複数の方法を組み合わせていくことが適切とみることができる。

3. 研究方法

研究方法の最初に、イメージに関する基本的な概念にふれておかななくてはならない。Downs and Stea (1973)は現実の地理的な事象を包括した空間を地理的環境、われわれの行動を規定する情報の集合体としての空間を行動的環境と呼んだ。またGould and White (1974)は、人間の行動が環境の中の実際に知覚される部分によってだけ影響を受けると述べ、知覚のフィルターの概念を提唱するとともに、イメージはこのフィルターを通過した情報の流れによって形成されるとした。これら2つの概念によれば、都市域のイメージは、都市の地理的環境の中から知覚のフィルターを通過して行動的環境の中にとりこまれた情報に基づいて形成されていると考えることができ、行動的環境にとりこまれる情報を知ることによって研究の端緒を見出すことができる。

行動的環境にとりこまれる情報にはさまざまなものが予想され、これらすべてを分析対象とすることは容易ではない。ところで服部や桜井がシンボルとしてあげたものには、地域に現存する特徴的な事物が多く、その地域のイメージと関連する場合が多々みられた。そこで「行動的環境にとりこまれる情報には、その地域に特徴的に存在する要素が含まれる」と仮定することによって、1つの有効な研究方法が見出される。地域に特徴的な要素を複数の側面から選択することによって、行動的環境にとりこまれる可能性のある情報の選出が可能になるからである。ここで今後の分析対象となる「地域に特徴的な要素」とは、木内(1968, p. 103)の提唱した地域要素⁵⁾と類似のものと判断されるので、以降この用語を用いる。

では地域要素として何を検討すべきであろうか。人々が地域イメージをもつ様子を見ると、1つの地域イメージはある程度の広がりをもった地域に対して認知されており、狭い地区ごとに個々の地域要素と結びついているとは考えにくい。むしろある程度

の広がりをもった地域を単位として、特徴的な地域要素をグルーピングしてから検討することが適切であろう。この点では最初に、地域的な分化傾向が明確で、従来の地域構造論の指標としても数多く用いられてきた居住者を1つの地域要素として分析し、これを土台にしてその他の地域要素を一括するのが有効であろう。そして次の段階として、これら地域要素のうち行動的環境にとりこまれたものが何であるかは、服部、桜井が用いたシンボルなどを手がかりに地誌的な資料を加えて検討すれば、かなり正し

く類推することが可能となろう。

本研究は以上の方法に従って、最初に地域要素の代表として地域分化の明確な居住者を検討し、次いで居住者以外の要素を検討する。さらにこれら地域要素と地域イメージとの関連を地域ごとに明らかにする。最後にその配列形態を検討し、イメージの構造論へと言及する。第1図は、以上の議論から得られた本研究の地域イメージの形成過程に関する概念図である。

研究対象地域として東京都区部を網羅する東西31 km、南北34 kmの長方形の地域を選定した。小地区を単位として、都市内の地域的差異が詳細に把握でき、また、ほぼ同一年次で居住者の属性や地域のさまざまな側面に関する資料が得やすいという利点から、基準地域メッシュ890地区を分析の単位とした⁶⁾。資料は地域メッシュ統計(1980年国勢調査基本集計)、工業統計(1980年)および商業統計(1979年)メッシュデータを使用し、一部に自作のデータを補足した。分析年次は資料間の整合からおよそ1980年となった。

II 地域要素の諸類型

1. 居住者特性に基づく居住者類型の設定

本章では、地域分化が明確な地域要素として居住者を最初に検討し、その分布特性に基づいて特徴的な居住者の集合体である居住者類型を設定する。Bito(1991)の内容と重複する部分が多いので、ここでは要約して述べる。

居住者類型の設定には、都市内の居住者の地域的な分化傾向を明らかにする因子生態分析の手法を利用し、資料には地域メッシュ統計(1980年国勢調査基本集計)を利用した。従来の因子生態分析の成果によれば、都市内の居住者の地域的な分化を引き起こす主要因として、居住者の社会的地位、家族状況および種族的状況があげられ、わが国ではこうした社会的地位と家族状況による地域分化が知られて

第1図 地域イメージの形成に関する概念図
Fig. 1 Concept of the "local image" in this study

第1表 居住者の因子構造と居住者類型
Table 1 Factor loadings and resident types

変数名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	共通性
1. 人口総数				0.73						0.70
2. 0～6歳人口率		-0.76				0.39				0.88
3. 13～15歳人口率			-0.82							0.80
4. 20～24歳人口率	0.38		0.62			-0.46				0.91
5. 30～34歳人口率		-0.69				0.57				0.89
6. 40～44歳人口率	-0.40		-0.64							0.75
7. 50～54歳人口率		0.84								0.81
8. 60～64歳人口率		0.75					0.30			0.83
9. 配偶者率			-0.51			0.72				0.90
10. 出生時からの居住者率					0.79					0.84
11. 昭和39年以前入居者率		0.62		0.54	0.33					0.91
12. 昭和54年以降入居者率			0.60		-0.45					0.68
13. 男性労働力率	-0.50		0.70							0.88
14. 女性就業者率		0.40		0.36			0.60			0.85
15. 完全失業者率				0.71						0.61
16. 雇人のある業主率					0.33		0.62			0.65
17. 農業従事者率					0.59					0.73
18. 建設業従事者率	-0.43							-0.66		0.67
19. 製造業従事者率	-0.52					0.36				0.63
20. 卸売小売業従事者率				0.32			0.73			0.86
21. 金融保険業従事者率	0.74			0.41						0.77
22. 運輸通信業従事者率									0.85	0.80
23. 専門職率	0.83									0.83
24. 管理職率	0.78						0.32			0.83
25. 事務職率	0.68			0.37						0.75
26. 運輸通信職率	-0.43								0.83	0.95
27. 労務職率	-0.88									0.94
28. 大学在学者率	0.69			0.31						0.80
29. 自市区町村従業者率	-0.50							0.64		0.79
30. 徒歩通勤者率			0.46					0.70		0.87
31. 準世帯率			0.68	-0.33						0.70
32. 7人以上世帯率										0.87
33. 核家族世帯率	-0.43	-0.31	-0.33	-0.55	0.81					0.83
34. 単身高齢者世帯率		0.59		0.35			0.40	0.33		0.83
35. 給与世帯率		-0.36				0.62				0.74
固有値	10.7	5.08	4.98	2.40	1.82	1.39	1.38	1.09	1.00	
説明率 (%)	30.8	14.5	14.3	6.9	5.2	4.0	4.0	3.1	2.9	
累積説明率 (%)	30.8	45.4	59.6	66.5	71.7	75.7	79.6	82.8	85.7	
因子の解釈	正	専門的管理的 職業従事者	高齢者	20代男性 労働者	長期居 住世帯	出生時か ら居住す る世帯	30代サラ リーマン	卸売小売 業主	職住近接 世帯	運輸通信 業従事者
(居住者類型)										
負		単純作業 従事者	30代家族	40代家族	多世代 世帯	新規入居 世帯	20代人口		建設産業 就業者	

因子負荷量は絶対値が0.30以上のものを示した。

いる（森川，1975）．そこで本研究では，居住者の社会的地位と家族状況を表わす指標として居住者の従事する産業，職業，学歴，年齢，居住年限など 35 の変数を選択し⁷⁾，これら変数と研究対象となる 890 の地区によって作られた 35×890 の地理行列に対して主軸法の因子分析を行なった．この結果，固有値 1.0 以上で 9 因子が抽出され，全体の分散の 85.7%が説明された．次いで因子の解釈を容易にするためにバリマックス法により因子軸の回転を行ない，回転後の因子負荷量行列に基づいて各因子の解釈を行なった（第 1 表）．

各地区はこれら各因子の複数の性格を合わせもつわけだが，特徴的な居住者の集合体としての居住者類型を設定するという目的から，ここでは各地区を最も代表する居住者の性格を，因子得点の絶対値が最大となる因子の性格として捉え，これによって 16 の居住者類型を設定した⁸⁾．

2. 地域類型の設定

各地域を構成する居住者以外の要素は多岐にわたっており，地域イメージに関連の深い要素を分析対象として限定することは大変難しい．居住地に関するイメージを分析した先学の例（Hourihan, 1979, 1984）によれば，社会的地位（social status），親しみ易さ（familiarity），住宅形式（housing-style），見た目（appearance），ライフスタイル（life-style），生活の質（quality of life）などが地域イメージに関連している．また Gill and Smith（1985）は地域社会の規模（community size）と位置（location）をあげた．Gould and White（1974）は経済的機会，社会的・文化的特性をあげた．また若林（1987）は，環境のイメージの測定法について都市域でなされた従来の研究を空間的スケールとジャンルによって分類し，イメージの基本的構造に影響を与える次元を要約した．

これら従来の研究によれば，人々が都市域の環境

に対してもつイメージに関連の深い要素のうち検討可能なものとして，位置，住宅形式，経済的機会など社会・経済的部門の諸側面に関するものがある．そこで本研究では，前節で求められた居住者類型に関連の深い要素をこれら諸側面からとることにし，各地区で居住者類型と重合する要素がその居住者に特徴的なものとした．こうして明らかになった要素を，分布地域に応じて居住者類型と一括することによって，特徴的な地域要素だけから構成される地域類型を設定した．

具体的な要素として本研究では，（A）都心からの隔絶性（2 要素）⁹⁾，（B）住宅条件（13 要素），（C）工業施設，および（D）商業施設の立地状況（65 要素）を選択した（第 2 表）．なお特徴的な要素の抽出を容易にするために，各居住者類型の因子得点の絶対値が大きい地区を代表地区（各類型約 20 地区）とし，この地区に重合するものを検討した¹⁰⁾．また，各要素が各居住者類型に特徴的であるとの判断は，代表地区と重合するそれぞれの要素数 Y が， $Y \geq X + 1\sigma$ （ X ：研究対象地域全体の各要素数の平均値， σ ：要素数の標準偏差）となる場合とした．

東京の都心部と 23 区西部にほぼ該当する地域については，Bito（1991）に報告しており，ここでは概観するにとどめる．

3. 都心部および山の手地域の地域類型

各居住者類型の代表地区の分布を第 2 図に示した．これによると「卸売小売業主」の居住者類型の分布は都心部に集中する．この「卸売小売業主」の類型に関連の深い要素を検討したところ，都心の北東側では戦前からある古い商店，卸売業関連の要素，南西側では出版・印刷業関連の要素と買回品を扱う商店などがみられた．そこで「卸売小売業主」の居住者類型を北東側と南西側に大別して地域類型を設定することが適切と判断した．北東側で特徴的な古い商店，卸売業関連の要素と，この居住者類型とを組

第2表 地域要素

Table 2 Local elements that typify the social and economic environment of the locality

要素番号	要素名(単位)	算出方法
(A) 都心からの隔絶性に関するもの		
1.	都心からの距離(km)	2. 都心からの時間距離(分)
(B) 住宅条件に関するもの		
住宅の建て方・所有関係		
3.	一戸建て住宅, 4. 共同住宅, 5. 持ち家, 6. 公営・公団・公社の借家, 7. 民営借家に住む普通世帯の比率	$(\text{該当する普通世帯数} / \text{住宅に住む普通世帯数}) \times 100$
居住室数別		
8.	1～2室, 9. 4～5室, 10. 7～8室, 11. 10室以上である普通世帯数または普通世帯人員の比率	$(\text{該当する普通世帯数} / \text{住宅に住む普通世帯数}) \times 100$ または $(\text{該当する普通世帯人員} / \text{普通世帯人員}) \times 100$
1人当たり畳数階級別		
12.	3.5畳未満, 13. 4.5～5.9畳未満, 14. 8.0～9.9畳未満, 15. 12.0畳以上の普通世帯の比率	$(\text{該当する普通世帯数} / \text{普通世帯数}) \times 100$
(C) 工業施設の立地状況に関するもの		
16.	工業全体の事業所数, 17. 工業全体の従業者数(人)	
経営組織・資本金階層別		
18.	会社経営資本金 200万円未満, 19. 会社経営資本金 200～1000万円, 20. 会社経営資本金 1億円以上,	
21.	個人経営の事業所比率	$(\text{該当する事業所数} / \text{工業全体の事業所数}) \times 100$
従業者規模別		
22.	1～3人, 23. 10～29人, 24. 300人以上の事業所比率	$(\text{該当する事業所数} / \text{工業全体の事業所数}) \times 100$
産業中分類別		
25.	食料品, 26. 繊維工業製品, 27. 木材・木製品, 28. 家具・装飾品, 29. パルプ・紙・紙加工品, 30. 出版・印刷・同関連品, 31. 化学工業製品, 32. 石油・石炭製品, 33. ゴム製品, 34. なめしかわ・同製品・毛皮, 35. 窯業・土石製品, 36. 鉄鋼, 37. 非鉄金属, 38. 金属製品, 39. 電気機械器具, 40. 輸送用機械器具, 41. 精密機械器具事業所の比率	$(\text{該当する事業所数} / \text{工業全体の事業所数}) \times 100$
(D) 商業施設の立地状況に関するもの		
42.	卸売業全体の商店数, 43. 卸売業全体の従業者数(人)	
44.	小売業全体の商店数, 45. 小売業全体の従業者数(人)	
46.	卸売業商店の比率	$(\text{卸売業全体の商店数} / (\text{卸売業全体の商店数} + \text{小売業全体の商店数})) \times 100$
小売業従業者規模別		
47.	1～4人, 48. 30～49人, 49. 50人以上の商店の比率	$(\text{該当する商店数} / \text{小売業全体の商店数}) \times 100$
小売業商品販売額規模別		
50.	200万円未満, 51. 200～2000万円未満, 52. 1億円以上の商店の比率	$(\text{該当する商店数} / \text{小売業全体の商店数}) \times 100$
小売業売り場面積規模別		
53.	20平米未満, 54. 50～500平米未満, 55. 1500平米以上の商店の比率	$(\text{該当する商店数} / \text{小売業全体の商店数}) \times 100$
小売業商店開設年代別		
56.	昭和19年以前, 57. 昭和20～39年, 58. 昭和51年以降である商店の比率	$(\text{該当する商店数} / \text{小売業全体の商店数}) \times 100$
59.	買回品業種の商店の比率	$(\text{買回品業種商店数} / \text{小売業全体の商店数}) \times 100$
産業小・中分類別		
60.	百貨店商店数の比率	$(\text{百貨店の商店数} / \text{小売業全体の商店数}) \times 100$
61.	呉服・服地・寝具, 62. 婦人・子供服, 63. くつ・はきもの, 64. 酒・調味料, 65. 食料品小売業, 66. 鮮魚, 67. 乾物, 68. 野菜・果物, 69. 菓子・パン, 70. 米穀類, 71. 自動車, 72. 自転車, 73. 家具・建具・畳, 74. 金物・荒物, 75. 陶磁器・ガラス, 76. 家庭用機械器具, 77. 医薬品・化粧品, 78. 燃料, 79. 書籍・文房具,	
80.	中古品小売業商店の比率	$(\text{該当する小売業商店数} / \text{小売業全体の商店数}) \times 100$

単位を示していないものはすべて％。

(地域メッシュ統計のうち昭和55年国勢調査, 昭和55年工業統計調査メッシュデータ, 昭和54年商業統計調査メッシュデータの各資料から算出)。

第2図 各居住者類型の代表地区の分布

1. 卸売小売業主 2. 長期居住世帯 3. 20代人口 4. 専門的管理的職業従事者 5. 単純作業従事者
 6. 高齢者 7. 新規入居世帯 8. 30代家族 9. 運輸通信業従事者 10. 多世代世帯 11. 出生時から居住する世帯 12. 40代家族

Fig. 2 Distribution of resident types

み合わせることによって、都心北東型の地域類型を設定した。南西側も同様に、出版・印刷業関連の要素および買回品を扱う商店を中心とした要素を組み合わせて都心南西型の地域類型を設定した。

同様にして西部に分布する居住者類型の分布と関連の深い要素についてまとめた。西部では、「専門的管理的職業従事者」の居住者類型が広く分散しているが、これには規模の大きな住宅を表わす諸要素が特徴的と判断された。そこで両者を山の手西部型の地域類型とした。また西北部においては「20代人口」と「長期居住世帯」の2つの居住者類型が集

中し、この類型には民営の借家と小売業商店が特徴的な要素と判断された。これらは山の手東部型の地域類型とした。以上の結果は第3表のようにまとめられた。

III 都心部および山の手地域の 地域類型と地域イメージ

1. 地域類型と地域イメージとの関連

本章では、求めた地域類型と地域イメージとを対照して、地域イメージに関連したとみられる具体的な地域要素を選出した。

第3表 都心部および山の手地域にみられる各居住者類型と関連の深い地域要素
Table 3 Local elements related to each resident type in the central area of Tokyo and the Yamanote area

地域 類型	居住者類型に特徴的 な地域要素	居住者類型および 関連の深い地区数	地域 類型	居住者類型に特徴的 な地域要素	居住者類型および 関連の深い地区数
都心北東型	卸売小売業主		山の 手 西部 型	専門的・管理的 職業従事者 *	
	11. 居住室数10室以上	12		10. 居住室数7～8室	16
	17. 工業従業者数	10		11. 居住室数10室以上	11 *
	42. 卸売業商店数	15 *		15. 畳数12畳以上	18 *
	43. 卸売業従業者数	12		19. 会社200～1000万円	7
	44. 小売業商店数	12 *		28. 家具装飾品事業所	7
	56. 商店昭和19年以前	16 *		68. 野菜果物商店	8 *
	該当地区数	17		該当地区数	23
都心南西型	卸売小売業主		山の 手 東部 型	20代人口 長期居住世帯	
	15. 畳数12畳以上	9 *		7. 民営借家	8 15 *
	30. 出版印刷事業所	12		8. 居住室数1～2室	11 16 *
	44. 小売業商店数	8 *		44. 小売業商店数	4 11 *
	59. 買回品商店	11 *		該当地区数	14 17
	該当地区数	12		該当地区数	14 17

* 印は代表的な地域イメージに関連すると考えられる要素，居住者類型，地域要素名は略記。

地域イメージを知る基本的資料として，住まいの図書館出版局（1988a, b）¹¹⁾を用いた。この資料は，74の町が対象とされ，各町が住む場所として評価されている点から資料として有効である。しかしながらこの資料には，中心部や郊外の町があまり含まれていない。また中心部については，人々のもつ地域イメージが必ずしも住む場所としての観点から形成されているとはいえない。そこで中心部と郊外については東京商工会議所（1984, 1987）¹²⁾，株式会社パルコ（1987）¹³⁾，博報堂社内資料¹⁴⁾を利用して補完した。

ところで地域イメージを具体的な地域要素と関連づけていくには，人々がその地域で想起したのを知るといふ点から服部，桜井の研究で用いられたシンボルが参考になる。本研究はこの点から，住まいの図書館出版局（1988a, b）の資料に掲載されているキーワードの資料を利用した。さらに各町の地誌的資料を検討し，その記載内容からの類推も行なった。キーワードは各町の代表的な地域要素を具体

的な名称であげているものが多く，それが地域イメージと直接に関連する場合が多いためであり¹⁵⁾，また地誌的資料も特徴的な地域要素に多くの説明をさく場合が多いからである。

各町の地誌的・歴史的資料については，朝日新聞社会部（1987a, b），角川日本地名大事典編纂委員会（1978）（以下角川，1978と略記）を中心とし，多数の区史，市史等を参考とした¹⁶⁾。ここでは Bito（1991）に発表した都心北東型など4類型については結果のみを述べ，新たに設定した他の4類型について詳述する。なおここでは必要に応じて地域イメージを単にイメージと略記する。

2. 都心部，山の手地域の地域類型と地域イメージ

都心北東型の地域類型に該当する町は，向島，両国，浅草，築地，明石，月島，外神田，新橋，虎ノ門などである。浅草，築地の町についてキーワードと資料から検討した結果，これらの町では資料の記載が商業施設，とくに規模の小さな商店に集中し，

Table 4
Perceived images and keywords in people's consciousness of the towns in the central area of Tokyo and the Yamanote area

都心北東型 イメージ	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい
都心南西型 イメージ	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい
浅草地	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい
都心南西型 イメージ	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい
麻布	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい
六本木	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい
赤坂	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい
新宿	町	明暗男性的 いい	* 古 田園的 いい	* 高級的 いい	* 庶民的 いい	* 文化的 いい	* 便利な いい	* 健康的 いい	住 みたい

数字は調査した100人のうち該当イメージに複数回答で賛同した数

*印は各地域類型に代表的な地域イメージ

(住まいの図書館出版局, 1988a, bより作成).

キーワードでは魚市場についてが中心であった（第4表）。そこで都心北東型の地域類型の中でイメージと関連が予想されるものとしては、卸売業、小売業の商業施設に関連する諸要素を考えることが適切と判断された。同様に都心南西型の地域類型に該当する町から麻布、六本木、赤坂、新宿の町について検討した結果、これらの町では買回品を扱う小売商店街と規模の大きな住宅に関する記載が中心であり、このことから買回品を含む小売商業施設と規模の大きな住宅条件を表わす諸要素を考えることが適切と判断された。

また山の手西部型の地域類型に該当する町から成城、祖師谷、吉祥寺の町について検討した結果、規模の大きな住宅地の景観、駅前商店街および居住者の特性に関する記載が卓越していた。そこでイメージと関連が予想されるものとして、居住者、小売業の商業施設、規模の大きな住宅条件を表わす諸要素を考えることが適切と判断された。また山の手東部型の地域類型に該当する町から阿佐ヶ谷、池袋、松原の町について検討した結果、規模の小さな借家および小売商店街に関する記載が卓越した。このことから、イメージと関連が予想されるものとして、借家と規模の小さな住宅を表わす住宅条件、小売商業施設に関する諸要素を考えることが適切と判断された。以上の結果からイメージと関連が予想される諸要素は第3表（*印）のようになった。

IV 郊外の地域類型と地域イメージ

1. 東部地域にみられる地域類型

ここでは前述の4つの地域類型をとりまく外側の地域について、同様の方法で地域類型の設定を行ない、地域イメージに関連したとみられる具体的な地域要素を選出した。

第2図によれば、「単純作業従事者」の居住者類型と「高齢者」の居住者類型は北部において分布が類似しており、両類型に共通に特徴的な要素として、

第5表のように工業施設を中心に多数の要素があることが明らかになった。そこでこれらを2つの居住者類型に共通する特徴的な要素と判断し、一括して墨東型の地域類型と設定した。また東京湾岸において分布が類似している「運輸通信業従事者」と「30代家族」および「新規入居世帯」の3つの居住者類型に共通して特徴的な要素が住宅条件、工業施設などからいくつか見出されたので、これらを湾岸型の地域類型と設定した。

1) 墨東型の地域類型と地域イメージ

墨東型の地域類型に該当する町は、千住、四つ木、京島、堤通、日本堤、今戸などであり、京島のイメージとキーワードは第6表に示した。これによるとキーワードについてはみるべきものがないが、博報堂生活総合研究所（1985）によれば、千住を中心としたこの地域は、下町の中でもとくに下町らしいところとして認知されている¹⁷⁾。そこでこの類型については、「下町」に関するイメージとキーワードを合わせて検討した。

京島の代表的イメージは「庶民的な」である。角川（1978）には京島について、「関東大震災と戦災から免れ、木造住宅と迷路のような路地の多い町。その狭小地域に住・商・工が混在する日本でも有数の人口過密地帯である」の記載がある。京島のイメージは、古い造りで規模の小さな住宅、商店、工場の混在する町全体の景観に関連しているとみられる。

下町のイメージには「活気がある、伝統がある、にぎやか」があり、キーワードには「人情、家と家とが密集、川」がある。「密集」はやはり町の景観に関連するものとみられ、「伝統がある」のイメージと「人情」のキーワードは居住者の特性を反映するものと考えられる。

墨東型についてイメージとの関連が予想されるものとして、古くて規模の小さな住宅条件、工業および商業施設、そして伝統を重んじるような居住者の要素を考えることが適切と判断される。イメージに

第5表 東部、西部地域にみられる各居住者類型と関連の深い地域要素
Table 5 Local elements related to each resident type in the eastern and western parts of Tokyo

地域 類型	居住者類型に特徴的 な地域要素	居住者類型および 関連の深い地区数			地域 類型	居住者類型に特徴的 な地域要素	居住者類型および 関連の深い地区数			
墨 東 型	単純作業従事者 高齢者				北 西 郊 型	40代家族 出生時居住世帯 多世代世帯				
	12. 畳数3.5畳未満	9	4	*		1. 都心からの距離	6	5	6	*
	16. 工業事業所数	5	3	*		2. 都心から時間距離	7	5	6	*
	21. 個人経営	9	4	*		3. 一戸建て住宅	4	5	4	
	33. ゴム製品	6	4			5. 持ち家	5	5	5	
	34. なめしかわ	6	5			9. 居住室数4～5室	4	1	5	
	56. 商店昭和19年以前	5	3	*						
	63. くつ商店	4	4							
該当地区数		9	8		該当地区数		7	6	6	
湾 岸 型	運輸通信従業者 30代家族 新規入居世帯				多 摩 丘 陵 型	出生時居住世帯 多世代世帯				
	4. 共同住宅	8	5	4		*	1. 都心からの距離	7	11	
	6. 公営借家	6	2	4		*	2. 都心から時間距離	6	11	
	9. 居住室数4～5室	4	7	8		*	3. 一戸建て住宅	6	7	*
	14. 畳数8.0～9.9畳未満	4	6	5		*	5. 持ち家	4	7	*
	20. 会社経営1億以上	7	2	3		*	9. 居住室数7～8室	4	9	
	23. 従業者規模10～29人	9	4	2		*	14. 畳数8.0～9.9畳未満	2	6	
	58. 商店昭和51年以降	5	9	3			58. 商店昭和51年以降	0	7	*
該当地区数		17	10	9	該当地区数		6	11		

* 印は代表的な地域イメージに関連すると考えられる要素

居住者類型、地域要素名は略記。

関連すると考えられる要素を第5表から選択した結果、*印をつけた5要素が該当した。

2) 湾岸型の地域類型と地域イメージ

湾岸型の地域類型に該当する町は、葛西、大森、辰巳、品川、芝浦、千葉県浦安市（分析年次においては町）舞浜、市川市行徳などである。ここでは大森、品川、浦安の町について検討し、それぞれの町のイメージとキーワードは第6表に示した。

角川（1978）の記載によれば、大森の町は1960年以降に京浜工業地帯の一部として海岸の埋め立てが進行し、平和島、京浜島、昭和島などの埋立地が作られ、工場、倉庫のほか大規模な公園や団地などが建設された。近年は電気機械、工作機械、車両などを製造する工場街と倉庫街が大半を占め、これに住宅、商店街が混在する。大森の代表的イメージは「暗い、やばったい、庶民的な」であり、キーワ

ードには「工業地帯、海と高台、下町、住宅地」がある。キーワードに工業地帯と住宅地がみられることから、代表的イメージは住宅と工場が混在する景観と関連するものであろう。また「庶民的な」のイメージは、「下町」のキーワードとともに墨東型の地域類型と共通し、古くて規模の小さな住宅、工場の存在と関連するものであろう。

品川もまた公営住宅を含んで住工混在地帯となっている。工場は東京電力品川火力発電所、雪印乳業、東洋水産、三菱ふそうなど大規模なものが主体である。この町については、隣接した南品川についての資料を参照した。南品川の代表的イメージは「沈滞した、暗い」であり、キーワードにはみるべきものがない。「暗い」のイメージは大森と同様に住宅と工場の混在する景観に関連するとみられる。

浦安の代表的イメージは「発展的な、新しい、庶

第6表 東部地域に認知されている地域イメージとキーワード
Table 6 Perceived images and keywords in people's consciousness of the towns in the eastern part of Tokyo

墨東型 イメージ 町	*庶民的な	古い	暗い	不便な	沈滞した	明るい	男性的な	やばった	イメージ・キーワード (下町)		
京 島	9	6	4	3	1	2	2	2	人情、家と家とが密集、川、 活気がある、伝統がある、祭、 にぎやか、商店街が多い		
湾岸型 イメージ 町	明るい	*暗い	*新しい	古い	*発展的な	沈滞した	田園的な	*庶民的な	不便な	やばった	キーワード
大 森	0	21	1	11	0	9	7	17	5	19	工業地帯、海と高台、下町、 住宅地、光と影、大森貝塚
南品川	3	10	1	7	3	11	1	9	8	9	線路の上の蜃気楼
浦 安	18	9	35	5	38	3	15	24	19	13	新旧入り交じり、埋立地、 ディズニールランド、新興住宅地、 マンション群

数字は調査した100人のうち該当イメージに複数回答で賛同した数。

*印は各地域類型に代表的な地域イメージ

(住まいの図書館出版局, 1988a, b および博報堂生活総合研究所, 1985より作成)。

民的な」であり、キーワードには「新旧入り交じり、ディズニールランド、新興住宅地」がある。キーワードに「新興住宅地」があることから、「発展的な、新しい」のイメージは埋立地上に新たに作られた住宅地景観に関連しているとみられる。またこれと対照的な「庶民的な」のイメージは、旧来の漁村を引き継ぐかたちで残存する古い町並みと関連するものであろうか。このような両極的なイメージは浦安に特有のものであり、キーワードである「新旧入り交じり」にも表われている。

湾岸型についてイメージとの関連が予想されるものとして、公営住宅を含む小規模な住宅条件および工業施設に関するものを考えることが適切と判断される。イメージに関連すると考えられる要素を第5表から選択した結果、*印をつけた6要素が該当した。

2. 西部地域にみられる地域類型

第2図の北西部縁辺部において分布が類似する「40代家族」と「出生時から居住する世帯」および

「多世代世帯」の3つの居住者類型に共通する特徴的な要素が都心からの隔絶性、住宅条件を中心に第5表のように明らかにされ、これらは北西郊型の地域類型にまとめられた。また多摩丘陵地域においては、「出生時から居住する世帯」と「多世代世帯」の2つの居住者タイプの分布が類似しているが、これらにも共通に特徴的な要素が都心からの隔絶性、住宅条件を中心として第5表のように明らかにされ、多摩丘陵型の地域類型とまとめられた。

なお「20代男性労働者、30代サラリーマン、職住近接世帯、建設産業就業者」の4類型については、該当する地区数が極端に少ないため分布地域の特徴が見出せず、特徴的な要素も特定できなかったため、どの地域類型にも含めないこととした。

1) 北西郊型の地域類型と地域イメージ

北西郊型の地域類型に該当する町は、大泉学園、新座市野火止、新倉、和光市南、広沢などである。ここでは新座市野火止、新倉、和光市南、広沢の町について検討した。これらの地域に関するイメージやキーワードの資料は入手できなかった。そこでこ

の地域のイメージを間接的に知るために、この地域を貫通する東武東上線の沿線イメージを利用することにした（第7表）。東武東上線の代表的沿線イメージは「田舎的な、非文化的な、プア」であり、キーワードには「団地、木造アパート」がある。角川（1978）によれば、野火止の近年の景観として「新座市の中心地となっているが、住宅と工場が人参、ごぼうなどの野菜畑、梨、葡萄などの果樹園や平地林と共に分布している」の記載がある。また新倉については「新河岸川右岸の低地は水田・畑作地帯で工場、倉庫、下水道処理場が点在する（中略）。台地上の畑地に農家、住宅街、商店などが混在する」の記載がみられる。和光市南、広沢については和光市資料に「1960 年以降に東京都内からの工場の進出があいつぎ、進駐軍のキャンプドレイクの返還後には西大和、諏訪原、南大和団地と陸上自衛隊の和光官舎が次々と建てられた。しかしながら近年でも畑地と住宅団地とが混在する」とある。

キーワードによれば、沿線イメージは住宅地の景観と関連するとみられるが、「田舎的な」については、資料の記載にみられたように農村景観との関連が考えられる。また「非文化的な、プア」のイメージについては、キーワードや資料から関連する要素を特定することが困難であるが、その内容から居住

者の特性に関連するものと考えられる。

北西郊型についてイメージとの関連が予想されるものとして、住宅条件、都心からの隔絶性に由来する農村景観および居住者の要素を考えることが適切と判断される。このうち農村景観については、都心からの隔絶性を表わす要素が間接的ながら関連する要素と考えられるので、第5表の*印をつけた5要素が該当するものとなった。

2) 多摩丘陵型の地域類型と地域イメージ

多摩丘陵型の地域類型に該当する町は、横浜市緑区荏田、市ケ尾、あざみ野、美しが丘、港北区大圃、牛久保、すみれが丘などであり、多くは東急多摩田園都市に含まれる町である。これらの地域に関するイメージやキーワードの資料は入手できなかったが、この地域は東急多摩田園都市線の沿線として典型的な住宅地域を形成しており、そのイメージはこの鉄道沿線イメージに強く反映されている。そこでこの沿線イメージの資料からイメージとキーワードを第7表に示した。

松原（1982）によれば、この地域の開発は1953年の多摩田園都市構想に始まる。鶴見川流域の未開発の山林と痩せた農地が交錯する準農村地帯で零細経営の農家が主体であったこの地域に、1962 年以降組合施行の一括代行土地区画整理手法により

第7表 東武東上線と東急多摩田園都市線の沿線に認知されているイメージとキーワード

Table 7 Perceived images and keywords in people's consciousness of the area along the Tobu-Tojo line and the Tokyu Tama Den-en-toshi line

路線 イメージ	沿 線 イ メ ー ジ							キーワード
	新 都 田 リ プ 文 非 健 不 男 女	会 舍 ッ 化 文 文 健 健 性	的 的 的 的 的 的 的	的 的 的 的 的 的 的	的 的 的 的 的 的 的	的 的 的 的 的 的 的	的 的 的 的 的 的 的	
東武線		17	6	7	1	2		団地、木造アパート
東急線		16	5	22	7	10	7	郊外住宅地、女性雑誌、奥様、お嬢様、マンション、スポーツ、カルチャー、ショッピング

数字は調査した100人のうち該当イメージに複数回答で賛同した数
(株式会社パルコ、1987より作成)。

3,160 ha (1980 年) の区画整理が行なわれた。開発地域は大きく 4 つに分けられ、各地域を串ざしにするかたちで田園都市線が開通し、各地域では東急によるマンション開発のほかに日本住宅公団や神奈川県住宅供給公社の中高層住宅団地を含む高密度な住宅地開発が進行している。荏田と市ケ尾は、開発以前からの古い集落をもつ町であるが、近年は高層住宅を含んだ市街地を形成し、周辺は宅地が多いが野菜栽培を行なう農地と山林が各所に残存する。荏田では早淵川に沿った低地が、また市ケ尾では鶴見川沿いの地域が市街化調整区域に指定されているため、谷地などでは水田、苗木畑、果樹園が残存する。このため丘陵地の密集した住宅地景観と河川沿いの低地の農業地域の景観との対照が顕著である。

東急多摩田園都市線の代表的な沿線イメージは「リッチ、新しい、健康的な」であり、キーワードには「郊外住宅地、女性雑誌、奥様、お嬢様、ショッピング」がある。「郊外住宅地」というキーワードからみて「リッチ、新しい」のイメージは住宅地景観と関連するものとみられ、また「リッチ」のイメージは「奥様、お嬢様」など居住者の質の高さを示すキーワードが表われているところから、居住者の特性とも関連しよう。またキーワードの「ショッピング」は「女性雑誌」の掲載記事に多いしゃれた商店がイメージに関連していることを示唆している。

多摩丘陵型についてイメージとの関連が予想されるものとして、高級な住宅条件と商業施設、および居住者の要素を考えることが適切と判断される。しかしながら第 5 表に示された 2 つの居住者類型は、おもに住宅地開発の行なわれていない地域で顕著であり、この点からイメージとの関連は考えにくい。結果として第 5 表の * 印をつけた 3 要素が該当するものとされた。以上の手順により、代表的な 8 つの地域類型についてそれぞれに代表的なイメージと関連する要素が明らかにされた。

V 地域イメージの配列形態

1. 地域イメージの認知されている地域

これまでに求めた地域類型を単位として、地域イメージに関連する地域要素の分布とそのイメージが認知されている地域の広がりから、人々の認知する地域イメージの配列形態を求めることが可能となる。ここでは Gould and White (1974) の等値線で表わす方法を参考とした。

最初に住まいの図書館出版局 (1988a, b) の資料を利用して、各地域類型に代表的な地域イメージの認知されている範囲を求めた。方法は、地域イメージの資料が存在する 74 の町の範囲を地図上で囲み、各町を代表する地区を 1 つ選出した。そしてこの地区をデータポイント (74 地点) としてその座標を縦軸、地域イメージを認知している人の百分率を横軸とした地理行列を作成した。そして SAS 統計パッケージの GCONTOUR プログラムにより、各地域イメージの比率に基づいて等値線を描いた。

鉄道沿線のイメージは、株式会社パルコ (1987) の資料を利用した。この資料には住まいの図書館出版局 (1988a, b) と共通するイメージが 10 種類あげられているので、山の手線ターミナル駅から放射状に走る 12 の鉄道路線について、区部を出た最初の駅をデータポイントとして分析に加えた。こうして各イメージの等値線を検討したところ、およそ 10% から 30% の等値線が認知された地域イメージの広がりを把握するのに適切であると判断された。そこでこの等値線に囲まれた地域が、各地域類型に代表的な地域イメージの認知されている地域と判断した。

次にこの地域に、地域イメージに関連する地域要素の分布と各地域類型に含まれる居住者類型 (代表地区) の分布を重ねた。この際に、地域要素と居住者類型の分布が重合した地区は、代表的な地域イメージが認知されているうえに、地域イメージに関連

する地域要素と特徴的な居住者があわせて存在することを意味しており、各地域イメージの「典型地区」と定義することができる。また、地域イメージに関連する地域要素のみが重合する地区は、典型地区に準ずる地区、すなわち「準典型地区」と定義す

ることができる。

こうして各地域類型を単位として、地域イメージの認知されている地域が、典型・準典型地区とともに表現された。

(1) 墨東型

(2) 湾岸型

(3) 北西郊型

(4) 多摩丘陵型

第3図 東部、西部地域に認知されている地域イメージ

(1) 墨東型 (2) 湾岸型 (3) 北西郊型 (4) 多摩丘陵型

1. 典型地区 2. 準典型地区

p:「庶民的な」のイメージが20%以上の人に認知されている地域 n:「新しい」のイメージが20% (多摩丘陵型のみ10%) 以上の人に認知されている地域 g:「発展的な」のイメージが20%以上の人に認知されている地域 d:「暗い」のイメージが10%以上の人に認知されている地域 c:「田園的な」のイメージが20%以上の人に認知されている地域 u:「非文化的な」のイメージが10%以上の人に認知されている地域 h:「高級な」のイメージが20%以上の人に認知されている地域

Fig. 3 Perceived images in people's consciousness of the towns in the eastern and western parts of Tokyo

2. 東部、西部地域に認知されている地域イメージ

上述の方法で、各地域類型を単位として、地域イメージの認知されている地域が明らかにされたが、都心北東型、都心南西型、山の手西部型、山の手東部型に対応する地域イメージについては、Bito (1991) に報告した、ここでは墨東型、湾岸型、北西郊型、多摩丘陵型の4つの地域類型に対して設定される地域を詳述する。

墨東型の地域イメージが認知されている地域は第3図-(1)のように設定された。墨東型では代表的な地域イメージとして「庶民的な」を選び、これに関連する地域要素として第5表から12, 21, 56の3要素が選出された。墨東型の地域イメージが認知されている地域は、足立区の本木から千住、日本堤、墨田付近を典型地区とし、準典型地区はその南側で尾久から亀戸にかけての総武線以北で東縁を荒川放水路に画されている。また地域イメージが認知されている地域はほぼ東部全域にわたっている。

湾岸型の地域イメージが認知されている地域は、第3図-(2)のように設定された。湾岸型では代表的な地域イメージとして「発展的な、新しい」という革新的な地域イメージと、「庶民的な」という大衆的な地域イメージを選び、これに関連する地域要素には4, 6, 9, 23の4要素が選出された。湾岸型の地域イメージが認知されている地域は東京湾岸に広く、典型地区を浦安市から市川市と平和島にもっている。

北西郊型の地域イメージが認知されている地域は第3図-(3)のように設定された。北西郊型では代表的な地域イメージとして「田園的な、非文化的な」を選び、これに関連する地域要素として1の要素が選出された。北西郊型の地域イメージが認知されている地域は、新座市付近から大泉学園にかけてを典型地区とし、周囲にわずかに準典型地区をもっている。多摩丘陵型の地域イメージが認知されている地域は第3図-(4)のように設定された。多摩丘

陵型では代表的な地域イメージとして「高級な、新しい」を選び、関連する地域要素には5, 58の2要素が選出された。多摩丘陵型の地域イメージが認知されている地域は、東急の多摩田園都市開発の進行するあざみ野、市ヶ尾付近を典型地区とし、これより北西側に準典型地区がみられる。

ここで Bito (1991) の都心部および山の手地域の結果と合わせ、各型の典型・準典型地区が交錯しないよう配慮して、各型の地域イメージの認知されている地域的範囲を画定した。このように地域イメージの違いによって地域区分を行なうと、服部 (1987) が述べたように、地域をイメージによって等質的に地域区分することになり、地域構造論へ展開する手法として適切と考えられる。これによって各地域イメージの配列形態が第4図のように明らかとなった。

3. 地域イメージの構造

第4図によれば、研究対象とした東京都区部および周辺地域には、都心付近を南北に二分するかたちで都心南西型、都心北東型の地域イメージ、これを囲んでおよそ区部に該当する地域に墨東型、湾岸型、山の手西部型、山の手東部型という4つの地域イメージ、そして西側では北西郊型、多摩丘陵型という2つの地域イメージが認知されており、各々が不規則な境界によって画されていることが明らかになった。

都心部を中心に考えるならば、それぞれの地域イメージは都心南西型、都心北東型の2つの地域イメージを中心に、左回りの渦巻状を呈しながらほぼ同心円状に配列しているとみることができよう。しかし各地域イメージの内容をみるならば、むしろ特定方向へ類似の地域イメージが連続する傾向が指摘できる。たとえば、「高級な」に代表される良質な地域イメージが認知されている地域は、住宅条件、商業施設、居住者など異なった地域要素とそれぞれ関連して、都心南西型から山の手西部型、多摩丘陵型

第4図 地域イメージの配列形態

1. 各型の典型地区 2. 各型の地域イメージが認知されている地域

A: 都心北東型 B: 都心南西型 C: 墨東型 D: 湾岸型 E: 山の手西部型 F: 山の手東部型
G: 北西郊型 H: 多摩丘陵型

Fig. 4 Arrangement pattern of perceived local images in people's consciousness

へと都心から南西方向に連続する。この方向は、月刊クロス編集室（1987, pp.10-41）が提唱する「山の手化」の方向と一致しているが、拡大する「山の手」の良質なイメージは、地域ごとに異なったさまざまな地域要素に基づいて醸成されていることが明らかとなろう。

また住宅条件の諸要素に関連して「新しい」という共通な地域イメージが認知されているのは、南部の湾岸型、多摩丘陵型であり、一方、住宅条件、工業施設の諸要素に関連して「庶民的な」という大衆的な地域イメージが認知されているのは、都心北東型、墨東型、湾岸型である。服部（1987）は地区の

イメージ化という図において、東部の下町（川の手）と西部の山の手との対照および都心対郊外の対照を提示している。本研究では南西方向、南方向、東方向などにも、特徴的な地域要素との関連に基づいて特定の地域イメージが配列することが明らかになったが、これは東京の地域イメージの大きな特徴であろう。

この点から考えると、人々が抱く地域イメージの構造は、基本的には都心から郊外へと同心円状に配列する傾向を示しているが、これは地域によって特徴的な地域要素が隣接した地域で共通の地域イメージを喚起する結果としていくつかの扇形構造が形成

され、これが市街地の拡大に伴って同心円状に拡大し、形成されたものと推定することができるのではないだろうか。

また各型の地域イメージと関連する地域要素を総括してみると、住宅の質、所有形態を表わす要素が最も普遍的であり、次いで商業地域の質を表わす要素が多い。これらが地域を特徴づける目立つ要素であるというだけでなく、人々のもつ地域イメージが都市の中心、郊外を問わず「そこに住み、生活する」という観点から形成されるためと考えることができる。その意味では、本研究で分析対象とした「地域イメージ」は「居住環境に対するイメージ」という性格づけができそうであるが、この点については推測の域をでるものではない。

今後は他の地域で同様の研究を積み重ねることによって本分析方法の妥当性の検証を続けていきたいと考えている。

本研究は1990年度に筑波大学に提出した博士号学位請求論文の内容の一部に加筆修正したものである。本研究を進めるうえで筑波大学地球科学系（現獨協大学）の山本正三教授をはじめ奥野隆史教授、佐々木 博教授、高橋伸夫教授、中川 正講師ほか筑波大学地球科学系の教官には終始ご指導いただいた。また佐賀大学の山下宗利講師、秋田大学の井上 孝講師には、分析過程で計算機などに関する技術的な助言を、筑波大学地球科学系技官の宮坂和人氏には論文中の図の作成をいただいたほか、論文作成中の長期にわたり暖かい援助をいただいた。資料提供に関しては建設省国土地理院地図管理部地図情報室、地理調査部地理調査技術開発室、国土庁計画調整局総務課国土情報整備室、総務庁統計局電子計算課の方々に御協力いただいた。なお資料の処理にあたっては、筑波大学学術情報処理センター（FACOM M-360）を利用した。

（投稿 1992年3月12日）

（受理 1992年7月11日）

注

- 1) 伝統的心理学においてイメージという用語は知覚された刺激、もしくはその複合体と定義されている (Downs and Stea, 1973)。
- 2) 内田 (1987) の定義した場所イメージは、ある主体が

思い描く心的内容であり個々人に特有のものとされる。ここで新たに地域イメージを定義するのは、人間集団が共通に抱く心的内容であるという点で場所イメージと区別する必要があるためである。

- 3) 認知地図とメンタルマップは厳密には異なり、中村 (1979b) によれば、「メンタルマップ」の用語が Gould によってイメージのもつ視覚的側面を強調して用いられたのに対して、心理学的な側面を強調した用語として「認知地図」が用いられた。同義の用語として Neisser (1976) の「定位図式」がある。
- 4) これはタウンイメージの形成要因の調査であり、町の景観、都市機能、来街頻度、評価、ファッション・タウン情報、地勢・形成史など分析に用いた項目を含めて8項目を用いている。
- 5) 木内 (1968) は地域要素の定義を「地表面を構成している要素」としており、地域に特徴的な要素であるか否かについては言及がない。しかし地域研究においては、その場所で要素の意味ある結合形態を重要としており、この点から本研究の意図する内容と類似するものと考えられる。
- 6) 基準メッシュは、一辺約1 km 四方のメッシュで標準地域メッシュシステムに含まれる (建設省国土地理院, 1985)。
- 7) 変数間の相関が高くなって疑似因子を生み出さないように考慮して、可能な限り変数は比率として用いた。
- 8) 因子得点の最大値が1.0を越えない場合には、その因子で代表される居住者の性格は、当該地区に特徴的とは判断しがたいので類型に含めなかった。この方法では複数の因子で特徴づけられる複合的な性格をもった地区が抽出されないが、後章で類型間の分布に基づいて適宜地区をまとめており、この過程で補完されるものとした。
- 9) 都心からの距離については、東京駅のあるメッシュの南西端から各メッシュ南西端までの直線距離とし、東京付近の1つの基準メッシュの大きさが南北方向に0.924 km、東西方向に1.131 kmあることを利用して算出した。都心からの時間距離については、都心駅と定義した21駅から、通勤時間帯に利用可能な平均的な列車と徒歩を利用した場合の到達時間を算出した。駅が存在するメッシュについては、都心駅までの最も短い所要時間とし、接続駅での乗り換えに要する時間を5分とした。また駅が存在しないメッシュについては、駅での待ち時間を5分とし、駅までの徒歩に要する時間をメッシュ1つ当たり10分として算出した。なお都心駅とは、東急株式会社作成の首都圏等時間帯地図 (昭和53年1月作成) の都心域の範囲に指定された18駅に国鉄線東京、有楽町、都営三田線日比谷駅を追加したものである。資料として1980年11月号の日本交通公社の時刻表を利用した。

住宅条件については地域メッシュ統計、工業施設、商

- 業施設については、工業統計、商業統計調査メッシュデータから算出した。
- 10) 専門的管理的職業従事者の代表地区は第1因子の因子得点が1.5以上を示す26地区、単純作業従事者の代表地区は第1因子の因子得点が-1.4以下を示す21地区である。以下同様に各代表地区を定めた。
- 11) この調査は、読売広告社「街のイメージとキーワード企画」アンケートによるものであり、東京近郊に居住する20代のOLを対象として、都内および近郊の74の町について、22項目のイメージを表わす言葉の中からふさわしいと思うものを5つまで選ばせている。また町を性格づけるキーワードも自由回答で記入させている。
- 12) 東京商工会議所(1984)の調査は、都心から30km圏にある高等学校を地域的偏りの無いように28校選び、その中から3年生男子1,614名、女子1,397名を対象として特定の8つの町のイメージを自由回答で記入させている。また東京商工会議所(1987)の調査は、東京商工会議所の議員法人の関係者の10歳から50歳までの898人を対象として、特定の10の町のイメージを自由回答で記入させている。
- 13) この調査は1987年の4月10日と11日に渋谷のパルコに来店した20歳台を中心とした女性100人に、39項目のイメージワードから思い浮かぶ鉄道沿線を回答させ、沿線ごとに集計している。
- 14) この調査は1985年2月15日から20日にかけて渋谷、新宿、池袋など都内10地点において16歳~49歳の男女1,000人に街頭面接調査を行ない、「下町、山の手、郊外とは具体的にどの地域を指すか、その地域を差別化する要素は何か」を質問している。この詳細な結果は博報堂社内資料「生活新聞に掲載されているが概要として入手可能なのは、博報堂生活総合研究所(1985)である。
- 15) イメージとキーワードについては、従来の研究でも混同して用いられている場合が多く厳密な区別がなされていない。桜井(1984)は、「その街にあるもので知っているもの、思い出すもの」をエレメント、その中でとくに重要なものをシンボルとした。また服部(1984, p.13)は都市シンボルを「市民によって納得された都市文化のお国自慢的、個性表現的なキャッチフレーズないし都市像」と定義した。本研究で利用したキーワードとは、調査の際「町を性格づけるキーワード」と質問しており、シンボルの意味に近いものと判断される。しかしながら一部に形容詞で表現されたものを含んでおり、厳密な意味ではシンボルと一致しない。そこで新たに本研究では、名詞や文章形式で表わされている用語をキーワード、形容詞として表わされている用語をイメージと分類した。このため、本研究で用いたキーワードは、内田(1987)の象徴要素に近いものと判断される。
- 16) その他の参考資料として青野・尾留川(1967)、石塚・成田(1986)、槌田(1978)、東京都(1979)および多数の区史、市史等がある。
- 17) 博報堂社内資料に掲載されたタウンメッセージ調査において下町ゾーンと思う地域を具体的にあげさせた結果、日暮里、北千住、浅草、秋葉原を結んだ範囲内とする回答が多数を占めた。

文 献

- 青野壽郎・尾留川正平編(1967):『日本地誌7 東京都』二宮書店, 510p.
- 朝日新聞社会部(1987a):『東京地名考 上』朝日新聞社, 409p.
- 朝日新聞社会部(1987b):『東京地名考 下』朝日新聞社, 415p.
- 安藤 清(1982):輪中地域住民の水害知覚と対策採用行動. 人文地理, 34, 310-322.
- 今栄国晴(1969):地方イメージにおける近畿圏の特徴——意味微分法と連想法による——. 京都大学近畿圏総合研究会編:『近畿圏——その人文・社会科学研究——』鹿島研究所出版会, 275-297.
- 石塚裕道・成田龍一(1986):『東京都の百年 県民百年史13』山川出版社, 354p.
- 岩本廣美(1981):子供の心像環境における「身近な地域」の構造. 地理学評論, 54, 127-141.
- 内田順文(1987):地名・場所・場所イメージ——場所イメージの記号化に関する試論——. 人文地理, 39, 391-405.
- 角川日本地名大事典編纂委員会(1978):『角川地名大事典13 東京都』角川書店, 1253p.
- 株式会社パルコ(1987):現代女性の沿線新イメージ. アクロス, 158号, 34-49.
- 木内信蔵(1968):『地域概論——その理論と応用——』東京大学出版会, 370p.
- 月刊アクロス編集室編(1987):『東京の侵略』PARCO出版, 223p.
- 建設省国土地理院(1985):『国土数値情報の概要』建設省国土地理院, 151p.
- 桜井和博(1984):東京のイメージ・イメージの東京——有標空間論, および東京におけるその具体的考察——. ヘルメス, 35, 67-128.
- 住まいの図書館出版局(1988a):『東京セクション「水の巻」』星雲社, 316p.
- 住まいの図書館出版局(1988b):『東京セクション「花の巻」』星雲社, 316p.
- 園部雅久(1985):東京の居住分化構造と空間パターン. 人文学報, 177号, 1-29.
- 寺本 潔(1984):子供の知覚環境の発達に関する基礎的研究——熊本県阿蘇谷の場合——. 地理学評論, 57A,

- 槌田満文編 (1978):『東京文学地名事典』東京堂出版, 406p.
- 東京商工会議所 (1984):『THE SAKARIBA タウンイメージ・東京』東京商工会議所, 130p.
- 東京商工会議所 (1987):『TOWN IDENTITY・まちの考現学 タウンイメージ・東京Ⅱ』東京商工会議所, 240p.
- 東京都 (1979):『東京百年史 3』東京都, 1491p.
- 中村 豊 (1978):名古屋市の地理的空間とメンタルマップ. 地理学評論, 51, 1-21.
- 中村 豊 (1979a):わが国のメンタルマップの空間的パターンと居住地選考体系. 人文地理, 31, 307-320.
- 中村 豊 (1979b):メンタルマップ研究の成果とその意義. 人文地理, 31, 507-523.
- 博報堂生活総合研究所 (1985):『タウン・ウォッチング——時代の「空気」を街から読む——』PHP 研究所, 226p.
- 服部銑二郎・加賀谷一良・稲永幸男 (1960):東京周辺における地域構造. 地理学評論, 33, 495-514.
- 服部銑二郎 (1984):『都市の表情——らしさの表現像——』古今書院, 259p.
- 服部銑二郎 (1987):地方都市の表情とイメージ——景観に読む都市の表現像——. 正泰夫編:『人口規模別にみた都市圏内の都市・村落景観とそのイメージに関する研究』昭和 60・61 年度文部省科学研究費補助金(一般研究 B) 研究成果報告書, 19-31.
- 福原正弘 (1977):東京都市圏の地域構造と変化. 地学雑誌, 86, 158-173.
- ボウルディング, K. E. 著, 大川信明訳 (1979):『ザ・イメージ』誠信書房, 222p. Boulding, K. E. (1956): *The image: Knowledge in life and society*. University of Michigan Press, 228p.
- 松原 宏 (1982):東急多摩田園都市における住宅地形成. 地理学評論, 55, 165-183.
- 森川 洋 (1975):都市社会地理研究の進展——社会地区分析から因子生態研究へ——. 人文地理, 27, 639-666.
- 山田浩之・小林良邦・近藤誠 (1974):東京大都市圏の圏域構造. 経済分析, 46 号, 1-58.
- 若林芳樹 (1987):行動地理学における環境のイメージの測定法. 理論地理学ノート, 5 号, 1-25.
- Bito, A. (1991): Regional characteristics of Tokyo 23 wards through the area image concept. *Science Reports of the Institute of Geoscience. Univ. of Tsukuba*, 12, 117-147.
- Cadwallader, M. T. (1979): Neighbourhood evaluation in residential mobility. *Environ. and Plan. A*, 11, 393-401.
- Day, R. A. (1976): Urban distance cognition: review and contribution. *Australian Geographer*, 13(3), 193-200.
- Demko, D. (1974): Cognition of southern Ontario cities in a potential migration context. *Econ. Geogr.*, 50, 20-34.
- Downs, R. M. and Stea, D. (1973): Cognitive mapping and spatial behavior. Downs, R. M. and Stea, D. eds.: *Image and environment*. London, Edward Arnold, 450p. ダウン, R. M., ステア, D. 編, 吉武泰水監訳 曾田忠宏・林 章・布野修司・岡房信訳 (1976):『環境の空間的イメージ』鹿島出版会, 470p.
- Gill, A. M. and Smith, G. C. (1985): Residents' evaluative structures of northern Manitoba mining communities. *Can. Geogr.*, 29, 17-29.
- Gould, P. and White, R. (1974): *Mental maps*. Penguin books, London, 192p. グールド, P., ホワイト, R. 著, 山本正三・奥野隆史共訳(1981):『頭の中の地図——メンタルマップ——』朝倉書店, 192p.
- Hourihan, K. (1979): The evaluation of urban neighbourhood 2: preference. *Environ. and plan. A*, 11, 1355-1366.
- Hourihan, K. (1984): Residential satisfaction, neighbourhood attributes, and personal characteristics: an explanatory path analysis in Cork, Ireland. *Environ. and Plan. A*, 16, 425-436.
- Johnston, R. J. (1973): Spatial patterns in suburban evaluations. *Environ. and Plan. A*, 5, 385-395.
- Kruskal, J. B. and Wish, M. (1978): *Multidimensional scaling*. SAGE, London, 120p. クラスカル, J. B., ウィッシュ, M. 著, 高根芳雄訳(1987):『多次元尺度法』朝倉書店, 110p.
- Lynch, K. (1960): *The image of the city*. Cambridge, MIT Press, Massachusetts. リンチ, K. 著, 丹下健三・富田玲子共訳(1968):『都市のイメージ』岩波書店, 276p.
- Neisser, U. (1976): *Cognition and reality, Principles and implications of cognitive psychology*. W. H. Freeman, San Francisco, 246p. ナイサー, U. 著, 古崎 敬・村瀬晃共訳(1987):『認知の構図——人間は現実をどのようにとらえるか——』サイエンス社, 264p.
- Osgood, C. E., Suci, G. J. and Tannenbaum, P. H. (1957): *The measurement of meaning* Univ. of Illinois Press, 346p.
- Preston, V. (1982): A multidimensional scaling analysis of individual differences in residential area evaluation. *Geogr. Ann.*, 64B, 17-26.

The Structure of "Local Image" in the Tokyo Ward Area and Surrounding Districts

Akio BITO*

This study attempts to clarify the structure of local image as people consciously perceive it, with a target area of localities in the Tokyo Ward area and its surrounding districts, on the basis of images that people have of localities and of the attributes peculiar to these localities. The target localities of the study are in a rectangular area comprising the Ward area of Tokyo and its suburbs, and the unit areas for analysis are Third Mesh units included in the Standard Locality Mesh system stipulated by the government, with 890 unit areas. The year of the source material is around 1980.

This study follows Lynch's concept of Public Image (1960), and defines the "shared emotional responses perceived by the majority of people towards the urban local environment" as the concept of "local image". For understanding this image, the Downs and Stea's (1973) and Gould and White's (1974) concept were used (see Fig. 1). In the first stage, the residents, who are accurate indicators of the division localities, and local elements were taken up, and the characteristic features of those localities were extracted. In the second stage, these local elements and the image of these localities were compared and interrelated, and local elements which were seen to be related to the local image were selected. Finally, the disposition of local image as perceived by people was deduced from the spatial spread of typical local images as interrelated with local elements, and the structure of these was studied.

As a result, in accordance with methods of factorial ecological analysis, 16 types of characteristic residents were extracted, and these were condensed into 8 resident types (Table 1, Fig. 2). For each resident type, several characteristic elements in that locality were selected from the 80 local elements (Table 2) which show the social and economic environment of the locality; and, just as with the resident types, 8 community types were established (Tables 3 and 5).

Next, those of the selected local elements which were related to the typical image of those localities were assessed by studying the symbols and topographical materials of the localities (Tables 4, 6 and 7). Further, the spatial spread of the local image as interrelated with the local elements was expressed in terms of isopleths such as those used by Gould and White in their Mental Map research (Fig. 3). Finally, by demarcating borders between different local images adjacent to one another, the disposition of local images as perceived by people was deduced and its structure studied.

As a result, 8 different types of local image were recognized in people's consciousness; and according to the shape of the disposition of these local images (Fig. 4), it became clear that there are two

local images dividing the central Tokyo area from north to south, viz., the “North-east central Tokyo type” and the “South-west central Tokyo type”, with four local images surrounding these, viz., the “Bokuto type”, the “Tokyo Bay type”, the “Western Yamanote type”, and the “Eastern Yamanote type”, more or less corresponding to the ward areas; then two local images were arranged around these, viz., the “North-west suburb type” and the “Tama Hills type” to the west and the “Bokuto type” and the “Tokyo Bay type” to the east. It also became clear that each of these is defined by unsystematic borders. If we take the centre of Tokyo as a focal point, we see that the local images are arranged in a more or less concentric pattern. We detected a tendency for similar local images to continue in a specific direction—for example, a high-quality local image typified as “high-class” in relation to housing conditions, commercial facilities, and residents, stretching to the southwest from the centre of Tokyo; or, to the south, a shared local image of “newness” in relation to housing conditions; and, finally, in connection with shared local elements such as housing conditions and industrial facilities, a working class community image typified as “mass population” stretching to the east.

In other words, we were able to point out that the structure of local images perceived by people, while tending to be arranged concentrically from the centre of Tokyo out to the suburbs, also tends to move in specific directions when shared local images are evoked in communities in which there is a continuation of characteristic local elements.

Key words: Tokyo, image, structure